

狩野川改修計画平面図(部分) 昭和9年11月
内務省横浜土木出張所発行

吉田町の榊原公幸さんから提供された昭和初期の狩野川流域の治水事業の進捗状況を示す資料を紹介し

ます。狩野川の治水事業の計画は、昭和4年に内務省横浜土木出張所から発行された『狩野川改修工事計画概要』にその計画概要が記されています。これには計画平面図も添付されていますが、この図に昭和9年(1934)11月現在の工事の進捗状況を書き加えたのがこの平面図です。

計画概要によれば改修工事は昭和2年度から14年度までの13箇年度継続事業として総工費予算635万円を以って施工するもので、その範囲は修善寺町から海に至る26kmに黄瀬川合流点から上流1kmを加えた27kmでした。その要旨は洪水による各種損害を防止し、併せて沿岸耕地の排水を良くするものであり、工事内容は概ね両岸に新堤を築き、大平の蛇行部を新たに掘削して直通し、堀之上・徳倉の狭隘部は掘削して拡幅し、洪水を快通させ、下流部は川幅を拡張し、新堤を築くとともに堤外を掘削し、低水路を浚渫し、舟運の利

便も向上させるというものでした。

昭和42年、建設省沼津工事事務所発行の『狩野川放水水路工事誌』によれば、上香貫大洞に改修事務所を設置し、実際に工事に着手したのは昭和4年からでした。その後、昭和8年に期間が3か年延長され17年度までとなり、それ以後も継続事業として小規模な改修工事が続けられ、昭和23年度頃に打切竣功で終了したようです。

この図は、計画期間延長直後にそれまでの進捗状況を示したものと見られます。この時点で大平地区の蛇行部の短絡水路の掘削や両岸の築堤、上香貫地区の流路拡幅掘削や築堤も概ね完了しています。河口部の両岸の掘削と築堤は工事中です。

『狩野川放水水路工事誌』には、昭和8年の竣工図が載せられていますが、それによると大平地区の蛇行部の築堤は完了していますが、短絡水路はまだ掘削中の様です。

昭和63年、清水町外原区発行の『外原』に掲載されている『大平捷水路通水式記念絵葉書』には「9.7.29通水記念」のスタンプが押されており、掘削は昭和9年7月に通水できるまでに進捗したと見られます。

出雲から白隠さんの贈り物

たか 高橋 敏

出雲松江歴史館で白隠の展示

本年4月島根県にある松江市立松江歴史館は「出雲国の白隠・大雅・風外—往来する禅と書画」と銘打って大がかりな企画展を開催した。偶々旧知の、5年前静岡市美術館で大規模展示「駿河の白隠さん」を実施した当時の学芸員（現静岡嘉堂文庫美術館）の美術史家吉田恵理さんが助言、協力した御縁で図録を頂戴する白隠冥利に浴した。

一覧したところ、遠国出雲の地に5点の自画賛と墨蹟2点、そして禁書とされた「辺微意知吾」までが見出され、公開されている。40年前当資料館の特別展「白隠とその時代」にはじまり「沼津市史」においても白隠を取り上げ、『白隠 江戸の社会変革者』（岩波書店）を公にした研究者の一人として地元沼津の関係者にも知ってもらおうべく老毫に鞭打って紹介の労を果たしたいと念ずる次第である。まず、以下8点を表示する。

白隠出雲のお宝

番号	書画	所蔵寺院	備考
1	大応国師図・大灯国師図・関山国師図(3幅)	天倫寺蔵	明和2年(1765)作
2	出山釈迦図	天倫寺蔵	
3	蘆葉達磨図	永徳寺蔵	
4	瀧見観音図	永徳寺蔵	
5	墨蹟 北野天満宮・大弁財尊天・娑竭羅龍王	永徳寺蔵	
6	鍾馗鬼味噌図	海禅寺蔵	
7	墨蹟 百寿字	蔭涼寺蔵	明和4年(1767)作
8	仮名法語 辺微意知吾	蔭涼寺蔵	

白隠の精髓を一瞥するこのような白隠さんのお宝が何故に山陰出雲から発掘されたのか。その経緯を探ることから白隠の隠れた実像が浮かび上がって来るのではなかろうか。そこで展示を担当した松江歴史館学芸員の藤岡奈緒美さんにご協力を仰いで出雲白隠遺産の謎に迫ってみたい。

出雲の鶴林門下円桂祖純・葦津慧隆

白隠は、本末・檀家制度に安居して黙って坐ってい

れば悟りを得らると「枯坐黙照」に墮落した宗門を憂い、禅宗刷新を糾合し、自ら松蔭寺に籠居、厳しい修業に専念した。白隠に賛同、教えを乞い、参禅する青年修行僧の雲水が全国各地から雲集した。原宿の一末寺に過ぎない松蔭寺は雲水・行脚の僧で溢れかえったという。往時の修業の凄まじさは今も境内に林立する、志半ばで亡くなった雲水の墓碑群が何よりの証である。

出雲から参禅、修業後帰国した2人の鶴林門下の禅僧は判明する。元文4年(1739)から寛保1年(1741)の3年間、50代半ばの革新の熱情に燃える師に随従した円桂祖純と葦津慧隆である(「白隠慧鶴基本年譜」)。祖純は宝暦4年(1754)松江城下の天倫寺七世、慧隆は宝暦9年(1759)出雲郡学頭村(現出雲市斐川町)の永徳寺四世の住持となって帰国する。その後慧隆は明和1年(1764)晩年の白隠の下に近侍、執事を務めている。祖純も明和2年81歳の白隠から1の「大応国師図」を贈られているので近くに奉仕していたとも考えられる。

2人は旧松江藩士の家に生まれ、6代松江藩主松平宗衍の信心、保護に厚いものがあつたといわれる。白隠出雲のお宝の1・2は祖純、3・4・5は慧隆がのおの各々師白隠からもらって持ち帰り、天倫寺、永徳寺に襲蔵されたものであろう。

鶴林門下素経元膺の「帰国証文」

一方蔭涼寺が所蔵する晩年の白隠の迫力を伝える2点は如何にして出雲に招来したのか。

蔭涼寺が所蔵する、白隠が亡くなる前年の明和4年(1767)4月松蔭寺が松江藩社役所に宛発行した雲州仁多郡三沢(現奥出雲町)妙厳寺(現蔭涼寺)弟子膺首座の「帰国証文」からその経緯が明らかになって来る。膺首座とは晩年の白隠に参禅、近侍した鶴林門下の素経元膺である。

膺首座こと素経元膺は「去丑年八月当山被致掛搭逗留」(去ぬる丑年八月から松蔭寺で修業のため逗留)していた。「去丑年」は宝暦7年(1757)に当たると考えられるので、元膺はまる10年もの間松蔭寺の白隠の膝下に

帰国証文之事
一 雲州仁多郡三沢妙厳寺弟子
膺首座去丑八月当山被致掛搭
逗留中於宗門別条無之候 今般被
致帰国候 二 付宗門証状仍而如件
駿州原宿禅宗 松蔭寺 圓

明和四年亥四月
雲州 寺社御役所
(継紙) (割り印)
以此証文右膺首座其寺可被差置候、以上
明和四丁亥五月六日 今村主部 ④
※ 原忠右衛門 ④
仁多郡三沢村 妙厳寺 松井源太夫 ④
※ (張り紙)「返り証文可差出候」

参禅修行していたことになる。白隠73歳から83歳晩年の白隠の身边に近侍して師を支えた鶴林門下でもあった。白隠は元膺の帰山に際し、松江藩寺社方に「帰国証文」を持参させ見送ったのである。更に今蔭涼寺が所蔵する2点を自らが筆を執って元膺に持たせ帰国させた。死期を悟った末期の贈り物であったろう。晩年の師弟関係が彷彿として来るものがある。
元膺に托された贈り物一禁書「邊微意知吾」

元膺が白隠から贈られたのは絵画ではなく、墨蹟であった。白隠は当時としては80歳の傘寿を超えた希少な長寿であった。長寿な白隠が目出度いことぶきの「壽」の字を真ん中にたっぷりと墨書し、周囲を百種の篆書体の「壽」で埋め尽くしたのが7の「百寿字」である。「維時明和第四丁亥歳孟正吉祥日」の自賛があり、元膺が白隠の下を離れる帰国証文の5月6日より5か月前の正月に揮毫されたことが判明する。

驚かされたのは白隠の心髄ともいうべき「邊微意知吾」の存在である。全長11m 6cmに及ぶ、ひしひしと筆圧を感じる渾身を込めた大作である。

白隠は僧院に安住せず、広く民衆の暮らしの現実に目を向け、提唱、説法をくりかえした異形の禅僧であった。時代は18世紀半ば、2世紀半にわたる江戸の平和は大きな曲がり角に直面していた。奢侈に溺れ、藩財政が破綻し、これを補おうと、領民への苛斂誅求が強行され、惣百姓一揆が頻発していた。宝暦4年(1754)白隠は暗君が酷吏を登用して領民を搾取る悪政を糾弾し、仁君・仁吏による仁政の治国治民を建言、訴えた、その書が「邊微意知吾」に結晶したのである。

この「邊微意知吾」は、まず既知の「邊鄙以知吾」(全集5巻所収)と表記が異なる。更なる相違点は既知の「邊鄙以知吾」が献上先を「何某の国何城の大主何姓何某侯」とお上を憚ってか隠しているのに対し「備陽岡城之太守豫州殿下近侍の需に應せし」と岡山藩第4代藩主池田伊予守宗政であることを暗示している。岡山藩3代藩主池田継政の需めに応えて献上されたという通説とも異なる継政を後継する宗政としている。新知見である。

「嗟危いかな」とお上の治世を弾劾した「邊鄙以知吾」

は危ない著作である。お上の忌諱に触れ、禁書・絶版に処せられた。そのため秘書に等しいといわれる。

蔭涼寺所蔵の「邊微意知吾」は、死の前年に既知の「邊鄙以知吾」とは別に新たに岡山藩主池田宗政に献上したことを敢えて明記して書き直されたのではなからうか。そして「邊微意知吾」と改め、禁書の正本として元膺の帰国に際し、出雲の地に遺ることを慮って托したのであろう。

白隠の名声を慕い、全国各所の禅宗寺院から松蔭寺に結集した雲水、行脚の青年僧は、厳粛な修行に耐え、師白隠の遺訓ともいうべき自筆の書画を土産に、帰国、帰山し、師の教えを伝えた。出雲の鶴林門下3人はその最たる事例である。今後は、数十から百に達すると思われる帰国、帰山した鶴林門下に着目し、彼らを追及することによって白隠研究が一層深化することが期待される。

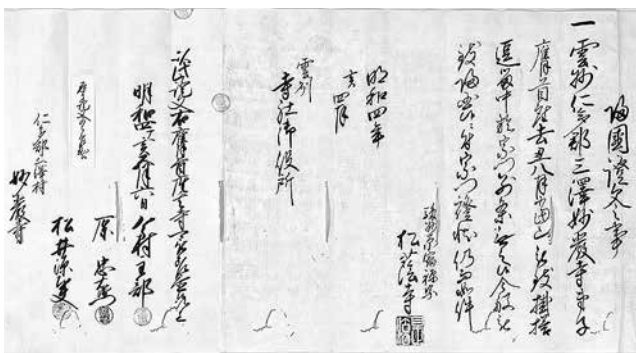
なお、写真は企画展図録から転載させていただいた。
 2023.6.20 脱稿 (国立歴史民俗博物館名誉教授)



墨蹟「百寿字」(蔭涼寺蔵)



仮名法語「邊微意知吾」(文頭部分・蔭涼寺蔵)



「帰国証文」(蔭涼寺蔵)



仮名法語「邊微意知吾」(文末部分・蔭涼寺蔵)

魚見のある風景⑰ 西浦足保片瀬・小足保

この絵葉書は、表面（宛名面）の体裁から大正7年（1918）から昭和8年（1933）までの間に製作されたと考えられるもので、袋入りの5枚セットの内の1枚です。外袋には『伊豆ノ勝地西浦名勝絵葉書』とあり、西浦の渡辺薬店が発行したものです。

写真中央左に電柱があり、その先端付近に3艘の漁船が見え、その左にも1艘の漁船が見え、その船に向かって中央右の岩礁から竹を束にしたと見られるアンバ（浮き）が点々と延び、船を過ぎると半円形になっているようです。この形から定置網の仲間の根拵網のようです。この当時の『西浦村誌』によれば、西浦では久連から久刺までの各地域で根拵網漁が操業されていたようです。

根拵網は末端の「U」字形の囲いの中に魚群が入るのを待って、その口を引き上げてふさぐ必要があります。口が広くて入りやすい反面、逃げ出すことも容易で、網の中の様子を常時見張っていなければなりません。そのため網の様子が見える高いところに見張台を設ける必要があります。その見張り台である魚見櫓が右上の林の上に小さく写っています。



絵はがき「伊豆西浦漁場ノ一部」

魚見櫓は、四本柱の二階建てで、二階には切妻屋根の小屋が設けられています。小屋の外壁は下見板で囲われているようで開口部が見えませんが、裏側の海が見える側が広く開いていると考えられます。

正確な位置は不明ですが、背景の静浦山地の象山（徳倉山）の形から、西浦足保の片瀬から小足保の海岸付近と推定されます。

資料館からのお知らせ

企画展・体験コーナーを開催しました

2階展示室に於いて、市制100周年記念の企画展「絵葉書に見る100年まえの沼津」を開催しました。

宛名面の形式から、沼津市が成立した大正12年（1923）7月1日前後の大正7年（1918）から昭和8年（1933）までに発行されたと考えられる絵葉書の写真から当時の市内の姿を振り返るものでした。

また、夏休み中には体験コーナーも開催しました。



体験コーナー・石臼挽きの様子



企画展「絵葉書に見る100年まえの沼津」開催状況

沼津市歴史民俗資料館だより

2023.9.25発行 Vol.48 No.2（通巻239号）

編集・発行 〒410-0822 沼津市下香貫島郷2802-1

沼津御用邸記念公園内

沼津市歴史民俗資料館 TEL 055-932-6266

FAX 055-934-2436

URL:<https://www.city.numazu.shizuoka.jp/kurashi/shisetsu/rekishiminzoku/index.htm>

E-mail:cul-rekimin@city.numazu.lg.jp